

キリスト教信条集

ハイデルベルク信仰問答 第一部 人間の悲惨について

問一 生きるにも死ぬにもあなたのただ一つの慰めは何であるか。

答 身体と魂とを持つ私が、生きるにも死ぬにもともに私のものでなく私が信頼する救い主イエス・キリストのものであるということである。イエス・キリストはその貴い血をもって、私のすべての罪のために完全に償い悪魔のすべての力から私を救い出し給うた。このように天にいます私の父の御旨がなければ一本の髪の毛も私の頭から落ちることはなく、実に、すべてのことが必ず私の祝福に役立つように私を守り給う。それゆえにまた、イエス・キリストはその聖霊によって、永遠の生命を私に保証し、今から後彼のために生きることを心からの喜びとし、かつその用意をさせ給う。

問二 あなたが、この慰めの中に祝福されて生きまた死ぬことができるために、どれだけのことをあなたは知る必要があるか。

答 三つのことである。第一に、私の **罪** と **悲惨** とがどんなに大きいか。第二に、私のすべての罪と悲惨とからどのようにして **救い** 出されるか。第三に、私はこのような救いに対して、神にどのように感謝すべきか、ということである。

第一部 人間の悲惨について

問三 あなたは自分の悲惨を何によって知るか。

答 神の律法によってである。

問四 では神の律法は私たちに何を要求するか。

答 キリストはマタイ伝第二十二章にこのことを要約して私たちに次のように教え給う。「『なんじ心を尽し、精神を尽し、思いを尽して、主なるなんじの神を愛すべし。』これは大いにして第一の誠命（いましめ）なり。第二もまた、これにひとし。『おのれのごとくなんじの隣りを愛すべし。』律法全体と預言者とは、この二つの誠命によるなり。」

問五 あなたはこのすべてを完全に守れるか。

答 できない。それは、私には生まれつき神と私の隣り人とを憎む傾向があるから。

問六 それならば神は人間をそのように悪くよこしまに創造し給うたのであるか。

答 そうではなく、神は人間を善く、また御自身の似姿にしたがって、すなわち、真の義と聖とにおいて、創造し給うた。それは人間が自分の創造者なる神を正しく知り、心から愛し、永遠の祝福の中に神と共に生き、神をほめたたえるためである。

問七 それならば、人間のこのような墮落した性質はどこから来るのか。

答 パラダイスにおける、私どもの最初の祖先である、アダムとエバとの墮落と不従順とからである。そのことによって、私どもの本性は毒せられてしまって、私どもはすべて罪のうちに受胎され、その中で生まれることになった。

問八 しかし私たちはただ一つの善に対しても全く無能力であり、あらゆる悪を行う傾向を持っているほどに墮落しているのか。

答 そうである。神の御霊によって、私たちが新たに生れない限りはそうである。

問九 それでは、神は人間が行うことのできないことを、その律法において人間に要求するという不正を人間になしてないだろうか。

答 そうではない。なぜならば、神は人間を、それができるように創造し給うたからである。しかし、人間は悪魔のそそのかしのために、故意の不従順によって、自分自身とすべての子孫とから、この賜物を奪い取った。

問一〇 このような不従順と墮落とを神は罰しないで済ますであろうか。

答 決してそのようなことはない。神は私たちの生まれながらの罪に対しても、また現実的な罪に対しても烈しく怒り、時間の中においても永遠においても正しい審判によってこれを罰しようとし給う。それは神が「この律法の書になせと記されたるすべてを守らざる者は、何人も皆呪わるべし」と語り給うた通りである。

問一一 それでは、神はまた憐み深くあり給わないのか。

答 神はまことに憐れみ深くあるが、同時に正しくもある。それゆえに、神の義は、神の至高の尊厳に対して犯された罪が霊肉に対する最高の、すなわち永遠の、刑罰によって罰せられることを要求する。

問一二 そこで、神の正しい審判によれば私たちは時間的・永遠的な刑罰に値するがゆえに、いかにして私たちはこの刑罰を逃れて、再び恩恵に到ることができるのだろうか。

答 神はその義が充たされることを欲し給う。それゆえに私たちは自分自身によってか、あるいは他の人によってか、その正義に対して完全な支払いをなさねばならない。

問一三 しかし私たちは自分自身で支払いをなし得るのか。

答 決してできず、かえって私たちは負債（おいめ）を日ごとにいっそう大きくしている。

問一四 それでは単なる被造物にすぎないあるものが私たちのために支払いをなすことができるのか。

答 できない。なぜならば、第一に、神は人間が犯したことを他の被造物において罰しようとなさらない。第二に、単なる造られたる者にすぎないものは罪に対する神の永遠の怒りの重荷に耐え、他の人々をそれから救うことはできないからである。

問一五 それならば、私たちはどのような仲保者、贖罪者を求めねばならないか。

答 真の、義しい人間、しかも、すべての造られた者よりも強い、すなわち同時に真の神である者であるような方である。

問一六 なぜ彼は真の、義しい人間でなければならないのか。

答 なぜなら、神の義は、罪を犯した人間性が罪の償いをなすことを要求するからである。しかし、自分自身が罪人であるような人間は誰も他の人々のために償いをなし得ないであろう。

問一七 なぜ、その人は同時に真の神でなければならないのか。

答 それは、彼の神性の力によって、その人性において、神の怒りの重荷を負い、私たちのために義と生命とを獲得し、かつそれを再び私たちに与えるためである。

問一八 しかし、真の神であると同時に、真の義なる人間であるというこの仲保者とは、誰であるか。

答 完全な救いと義とのために、私たちのところに遣わされ給うた、私たちの主イエス・キリストである。

問一九 あなたはそのことを何によって知るか。

答 聖なる福音によってである。その福音は神御自身が最初パラダイスにおいて啓示し、後には聖なる父祖たち預言者たちを通して宣べ伝えしめ、犠牲とその他の律法の儀式によつて具象化し、しかし最後には、その愛し給う御子を通して成就し給うた。

問二〇 それならば、すべての人がアダムによって失われたように、すべての人がキリストによって再び救われるのであるか。

答 そうではなく、ただ真の信仰を通してキリストと一体とせられ、彼の恩恵をすべて受け入れる者のみである。

問二一 真の信仰とは何であるか。

答 単に、神が御言において啓示し給うたすべてのことを私が真実であると考えある種の認識のみでなく、また、福音を通して聖霊が私のうちに起こし給う心からの信頼のことをいうのである。この信頼のゆえに他の人々だけでなく私にも、罪の赦しと永遠の義と救いとが、全く恵みからただキリストの功績のみによって、神から豊かに与えられる。

問二二 しかしキリスト者にとって信ずる必要のあることは何であるか。

答 私たちに対して福音のうちに約束されているすべてのことである。それを私たちの疑い得ない公同のキリスト教信仰箇条が要約して私たちに教える。

問二三 それをどのように言いあらわすか。その信仰箇条とは何であるか。

答 「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女（おとめ）マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。我は聖霊を信ず。聖なる公同（キリスト）教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体（からだ）のよみがえり、永遠の生命を信ず。」

問二四 この信仰箇条はどのように分けられるか。

答 三つの部分にである。第一は父なる神と私たちの創造について、第二は子なる神と私たちの救いについて、第三は聖霊なる神と私たちの聖化についてである。

問二五 神の本質はただ一つしかないのに、なぜあなたは父・子・聖霊と三つに呼ぶのか。

答 なぜなら、神がその御言において、この三つの区別された位格（ペルソナ）が唯一の、真の、永遠の神であるというふうに、御自身を啓示し給うたからである。

父なる神について

問二六 あなたが「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。」と言う時、あなたは何を信じるのか。

答 天と地をその中にあるすべてのものとともに無から造り、それらのものを永遠の定めと摂理とによって保ち、それを支配し給う、私たちの主イエス・キリストの永遠の父が、御子キリストのゆえに、私の神、私の父であり給うということを私は信ずる。この神に私は信頼して、体と魂とに必要なすべてのものを私に備えて下さることを疑わず、この涙の谷において私に送り給うあらゆる禍をも、私に役立せ給うことを、疑わない。なぜなら神は全能の神としてなしえ給うし、また真実なる神としてそれをなすことを欲し給うからである。

問二七 あなたは神の摂理ということをどのように理解するか。

答 神の全能で、現在する力を理解する。それによって、神は天と地とすべての造られたものを、あたかもその御手によるごとくに、保ち支配し給う、ゆえに木の葉も野の草も、雨もひでりも、豊年も凶

年も、食物も飲物も、健康も病気も、富裕も貧困も、確かに一切のことは偶然ではなく、父としての御手から私たちに來るのである。

問二八 神の創造と摂理を知ることからどのような益が、私たちにあるのか。

答 それは、私たちがいかなる敵対の中にあっても忍耐し、幸福の中にあっては感謝し、未来に起こることについては私たちが信頼すべき神にして父なる方に強い信頼をもつことができ、どのような被造物も神の愛から私どもを離れしめないものである。なぜなら、すべて造られたものは、神の御手の中にあって、御旨がなければ起こることも動くこともできないからである。

子なる神について

問二九 神の御子はなぜイエス、すなわち祝福を与える者と呼ばれるのか。

答 なぜかという、彼が私たちが私たちの罪から救い出し給い、私たちは他の何者にも求めることも見いだすこともできないからである。

問三〇 それならば、自分の祝福と救いとを聖者たちや自分自身やその他のものに求めている人でも唯一の祝福者イエスを信じているのであるか。

答 いや、信じているのではない。そのような人々はよしいエスを誇るとしても、行為においてはただ一人の祝福者、救い主イエスを否定している。なぜならばイエスが完全な救い主であり得ないか、それとも眞の信仰によってこの救い主を受け入れる者が自分たちの祝福に必要なすべてのことをイエスの中に必然的に持つか、いずれかであるからである。

問三一 かれはなぜ「キリスト」すなわち「油を注がれた者」と呼ばれるか。

答 なぜかと言うと、私たちの贖いに関する神のかくされた決定と御旨とをくまなく私たちに啓示するところの、私たちの大預言者、教師となるために、また、かれの身体と言う唯一の犠牲によって私たちに贖い、父の前に私
たちを常にとりなす私たちの唯一の大祭司となるために、また御言と御霊とによって私たちに支配し、私たちのために成しとげた贖罪の中に私たちを守り、私たちを保つ私たちの永遠の王となるために、父である神によって定められ、聖霊をもって油注がれたからである。

問三二 しかしあなたはなぜキリスト者と呼ばれるのか。

答 なぜならば、私は信仰によって、キリストの肢であり、したがってそのそそがれた油にあずかるからである。それは私がキリストの御名を告白し、私を活ける感謝の供え物として、キリストに捧げ、この人生においては自由な良心をもって罪と悪魔と戦い、この後には、永遠にすべての造られたものをキリストとともに支配するためである。

問三三 私たちも神の子であるのに、主のみはなぜ神の「独り子」と呼ばれるのか。

答 なぜと言うに、キリストのみが神の永遠の本来の子であるからである。しかし私たちは彼のゆえに、恵みによって神の子らとされたのである。

問三四 あなたはなぜ「私たちの主」と呼ぶのか。

答 彼は私たちを彼のものとなすために、金や銀によらず、彼の貴い血によって、私たちを、身体も魂も、罪から、悪魔のすべての力から救い贖い給うたからである。

問三五 彼が「聖霊によりてやどり、処女（おとめ）マリヤより生れ」、と言うのはどういう意味であるか。

答 それは、真の永遠の神であり、いつまでもそのような神であり給う神の永遠なる御子が、聖霊のはたらきによって、処女マリヤの肉と血とから、真の人間性を身に負い、自らもまたダビデの真の裔となり、罪を除いてすべてのことにおいてその兄弟たちと等しくなり給うたということである。

問三六 キリストの聖なる受胎と誕生とからあなたはどのような益を受けるか。

答 その益は、彼が私たちの仲保者であり、その罪なきこと、全き聖さによって、私がおの中に孕まれた罪を神の御顔の前に、覆い給うということである。

問三七 「苦しみを受け」と言う句によってあなたはどのようなことを理解するか。

答 それは、かれが地上に生きていた時はいつでも、ことにその生涯の終りにおいて、その肉体にも魂にも、全人類の罪に対する神の怒りを身と魂とをもって担い給うた、ということである。それは唯一のなだめの供え物としての、その苦難によって、私たちの身と魂とを、永遠の刑罰から救い出し、私たちのために、神の恵みと義と永遠の生命とを得させるためであったのである。

問三八 彼はなぜ裁判官ポンテオ・ピラトのもとに苦しみ給うたのか。

答 それは、彼が罪なくして、この世の裁判官のもとにおいて断罪され、それによって、私たちに下るはずの、神のきびしい審判から私たちを救い出すためであった。

問三九 彼が十字架につけられたというのは、別の死て方をされたよりも、さらに大きな意味があるのか。

答 そうである。なぜなら、それによって私は、十字架の死は、神によって呪われたものであったのであるから、私の上に置かれてあった呪いを彼が御自分の上に引き受けられたということを確認するからである。

問四〇 なぜキリストは死の苦しみを受けなければならなかったのか。

答 なぜかと言うと、神の義と真実とのために、神の御子の死を通してする以外に他のいかなるものによっても私たちの罪は償われ得ないからである。

問四一 彼はなぜ葬られ給うたか。

答 それによって彼が真に死に給うたことを立証するためである。

問四二 それならば、キリストが私たちのために死に給うたのであれば、なぜ私たちもまた死なねばならないのか。

答 私たちの死は私たちの罪の償いではなく、ただ罪の死滅と、永遠の生命への入口にすぎないのである。

問四三 私たちは十字架上のキリストの犠牲と死とから、さらにどのような益を受けるか。

答 それは、キリストの力によって、私たちの古き人が彼と共に十字架につけられ、殺され、葬られ、もはや肉の悪しき欲が私たちの中で支配せず、かえって私たち自身を感謝として彼に捧げるようになるという益である。

問四四 つづけて「陰府に降り」、とあるのはなぜであるか。

答 それは、私の最も大きい試練の時にも、わが主キリストが十字架におよびそれ以前にその魂においても忍ばれた言語に絶するいい難き不安、苦痛、怖れとによって、私を地獄の不安とはげしき苦痛とから救って下さった、ということを確認するためである。

問四五 キリストの「よみがえり」から私たちはどのような益を受けるか。

答 第一に、キリストの死を通して私たちのために獲得した義に私たちをあずからせるために、彼はよみがえりを通して死に打ち勝ち給うた。第二に、私たちも今、キリストの御力によって、新しき生命へとよびさまされる。第三に、キリストのよみがえりは私たちにとって私たちの祝福されたよみがえりの確かな保証である。

問四六 「彼が天に昇り給うた」、と言うことをあなたはどのように理解するか。

答 キリストがその弟子たちの目の前で地から天にあげられたが、生きている者たちと死んだ者たちとを審判するためにふたたび来る時まで、私たちのためにそこに在すということを理解する。

問四七 それでは、キリストが私たちに約束し給うたごとくに、世の終りまで彼は私たちと共にい給わないのか。

答 キリストは真の人であり、真の神であり給う。その人性にしたがえば、彼は今地上にい給わないが、その神性と尊厳と恩寵と聖霊にしたがえば、彼は決して私たちから離れ給うことはない。

問四八 しかし、神性のあるところには、どこにでも人性があるというのでないなら、キリストの二つの本性は互いに分離されないだろうか。

答 決してそうではない。なぜかと言うと、神性は理解を超えており、いずこにも臨在するものであるから、採り給うた人性の外部にも存在するのであるが、しかもそれにも拘らず、同時にその人性の中にも存在し、常にその人性と人格的に結合しているのである。

問四九 キリストの昇天は私たちにどのような益を与えるか。

答 第一に、キリストが天の御父の前にある弁護者である。第二に、かしらとしてのキリストが、彼の肢である私たちを、御自分のもとに迎え入れるに違いないと言う確かな保証として私たちは自分たちの肉を天に持っている。第三に、キリストが保証として彼の御霊を私たちに遣し給うということであって、その能力を通して、私たちは神の右に座し給うキリストが在すあの上にあるものを求め、地上にあるものを求めないようになるのである。

問五〇 なぜ「神の右に座し給えり」、と付け加えられているのか。

答 キリストは御自身の教会の首（それによって父は万物を支配し給う）としてそこで御自身を示し給うため、天に昇り給うた。

問五一 私どもの首（かしら）であるキリストのこのような栄光は私たちにどのような益があるのか。

答 第一に、彼が聖霊によって、彼の肢である私どものうちに、天の賜物を注いで下さることである。第二に、彼がその御力によって一切の敵に対して私どもを守り、支えて下さる、ということである。

問五二 「生ける者と死ねる者とを審き給わんため」のキリストの再臨はあなたにどのような慰めを与えるか。

答 それは、いかなる悲しみ、いかなる迫害にあっても、頭をもたげて、私とその審判者を待ち望む、ということである。その審判者は私のために御自分を神の審判に差し出し、私から一切の呪いを取り除き給い、審判者として天から再び来たり給うであろう。かれは御自身と私との敵を永遠の定罪の中に投げ入れ、その選び給いしすべての者と共に、私を御自分のもとに、天にある喜びと栄光との中に迎え入れ給うであろう。

聖霊なる神について

問五三 「聖霊」についてあなたはどのようなことを信ずるか。

答 第一に、聖霊が父および御子と等しく永遠なる神である、ということである。第二に、聖霊が私にも与えられ真の信仰によって私をキリストおよびそのすべての恵みにあずかる者となし、私を慰め、私と共に永遠にいます、ということである。

問五四 あなたは「聖なる公同のキリスト教会」についてどういうことを信ずるか。

答 神の御子が全人類の中から、永遠の生命へと、選ばれし群を、その御霊と御言とによって、真の信仰の一致において、世の始めから終わりに至るまで、集め、守り、保ち給うということを信ずる。また私がこの群れの活ける肢であり、いつまでも肢として留まるであろうということを信ずる。

問五五 あなたは「聖徒の交わり」をどのように理解するか。

答 第一に、信ずる者は（すべてまた一人一人）主キリストとそのすべての宝と賜物とに与るということを理解する。第二に、一人一人がその賜物を、いつでも喜んで他の肢々の益と救いとのために、用いるべきであると思わねばならないということである。

問五六 あなたは「罪の赦し」についてどのように信ずるか。

答 神はキリストの贖いのゆえに、生涯戦わねばならない私のすべての罪、また罪の本性をも、もはや憶え給わず、私がもはや審判にあうことなきように、恩恵によってキリストの義を私に与え給うということである。

問五七 「身体の復活」はどのような慰めをあなたに与えるか。

答 それは、私の魂が、この生涯の後直ちに、その首なるキリストのもとに受け入れられるだけでなく、私のこの身体が、キリストの能力を通してよみがえらせられて、再び私の魂と結合せしめられ、キリストの栄光の身体と等しいものにされるということである。

問五八 永遠の生命という条項はあなたにどのような慰めを与えるか。

答 私は今、心に永遠の歓喜の始めを感じているが、この生の終わった後、人の目がまだ見たこともなく、人の耳がまだ聞いたこともなく、人の心がまだ思わなかった完全な祝福を、所有して、永遠に神を賛美するであろう、ということである。

問五九 しかしあなたがこのようなことをすべて信ずるとき、どのような益を受けるか。

答 私がキリストにおいて神の前に義とされ、永遠の生命の世嗣ぎとなる、ということである。

問六〇 どのようにしてあなたは神の前に義とされるか。

答 ただイエス・キリストを信ずる真の信仰によるのみである。すなわち、私が神のすべての戒めに対して大変な罪を犯し、その戒めのどれ一つとして守ったことがなく、さらにいつもすべての悪に向う傾向を持っている、とって私の良心が私を告訴したとしても、しかも、神は、もし私が信ずる心をもって、ただその恩恵を受け入れるなら、あたかも私がいまだかつて何らの罪を犯さなかったかのごとく、そしてまた、キリストが私の代りに成し遂げ給うた一切の服従を私自身が成し遂げたかのごとく神は何ら私の功績によらず、ただ全くの恩寵から、キリストの完全な贖いと義と聖を私に与え、私のものとして下さるのである。

問六一 なぜあなたは信仰によってのみ義とされる、というのであるか。

答 それは私の信仰に価値があるから、私が神に喜ばれるということではなく、ただキリストの贖いと義と聖のみが神の御前における私の義であり、私はこの義を、ただ信仰によってしか受け入れて自分のものにするとうとができないからである。

問六二 しかしなぜ私たちの善行が神の御前における義、あるいはその一部分となり得ないのか。

答 それは、神の審判の前に立ち得る義が徹底的に完全であって、神の律法に全部合致せねばならぬのに、この人生における私たちの最善の行為でも、ことごとく不完全であり、罪によって汚れている。

問六三 しかし、この世においても、来たるべき世においても、私たちの善行が、何の価値もないものであるのに、神はこの世においても来たるべき世においても、報いを与えようとなさるのか。その報いは功績によるものではなくて、恩恵によるものである。

問六四 しかしこの教義は無思慮な放縦な人々をつくらないだろうか。

答 そうではない。なぜならば真の信仰によってキリストに接がれた者が、感謝の果を結ばないなどというとはありえないからである。

聖礼典について

問六五 それでは信仰のみが私たちがキリストとそのすべての恩恵に与らしめるのであれば、その信仰は、どこから来るのであるか。

答 聖霊が聖なる福音の説教によって、私たちの心の中に、信仰をおこし、また聖礼典の執行によって、信仰を保証して下さる。

問六六 聖礼典とは何であるか。

答 それは眼に見える聖なる標識であり、印章である。神はその執行によって、神が十字架において成就されたキリストの唯一の犠牲のゆえに私たちに罪の赦しと永遠の生命を、恩寵から与え給う、という福音の約束を私たちにいっそうよく理解せしめ、かつ確証し給うために、それらを定め給うたのである。

問六七 それでは、御言と聖礼典というこの二つのものは、われらの信仰にわれらの救いの唯一の根拠としての十字架におけるイエス・キリストの犠牲を指示するように樹てられているのであるか。

答 確かにそうである。なぜならば、われらのすべての救いが、われらのために十字架において起こったキリストの唯一の犠牲の中にあることを、聖霊は福音において教え、聖礼典によって確証し給うからである。

問六八 キリストは新約聖書において、いくつの聖礼典を定め給うたか。

答 二つ。聖なる洗礼と聖晩餐である。

聖なる洗礼について

問六九 十字架におけるキリストの唯一の犠牲が、あなたの益になるということ、どのようにしてあなたは聖なる洗礼において、思い起こされ、確信せしめられるのか。

答 それは、キリストがこのような外的な水の洗いを定め給い、その際あたかも外面的に、身体の汚れを洗い落とす水で洗われるように確実に、私はキリストの血と霊とによって私の魂の汚れから、すなわち、私のすべての罪から洗われているのだ、というたことを約束し給う。

問七〇 キリストの血と霊とによって洗われているとはどういうことか。

答 それは、キリストが十字架におけるその犠牲においてわれらのために流し給うた彼の血のゆえに神から恩寵によって罪の赦しを得るということである。しかる後にまた聖霊によって新しくされ、そして潔められてキリストの肢とされ、時と共にいよいよ罪に死んで、信仰深い責むべきところのない生活を送るということである。

問七一 われらが洗礼の水によって洗われているのと同様に確かに、キリストの血と御霊とによって洗われているということ、キリストはどこで約束しておられるか。

答 それは洗礼の設定においてである。次のように述べられている。「なんじら往きて、もろもろの国人を弟子となし、父と子と聖霊の名によりて、バプテスマを施せ」（マタイ伝二八・一九）「信じてバプテスマを受くる者は救わるべし、しかれど信ぜぬ者は、罪に定めらるべし」（マルコ伝血六・一六）この約束は聖書が洗礼を、再生の洗いとか、罪の洗い去りとか呼んでいるところでも繰り返されている。

問七二 それならば、外的な水の洗いが、罪の洗い潔めそのものであるか。

答 そうではない。なぜなら、イエス・キリストの血と聖霊とのみが、われらをすべての罪から潔めて下さるのだから。

問七三 それならば、なぜ聖霊が洗礼を、再生の洗いとか罪の洗い去りとか呼び給うのであるか。

答 神がそのように語り給うのには、大きな理由がある。すなわち、神はそれによって、肉体の汚れが水で取り去られるのと同じように、私たちの罪もまたキリストの血と御霊とによって取り去られる、ということ、われらに教えようとし給うのみならず、むしろ神は、この神的な保証と標識とによってわれらの肉体が水で洗われるのと同じように、われらの罪から霊的に洗われるのだ、ということ、われらに保証しようとし給うのである。

問七四 幼児にも洗礼を授くべきだろうか。

答 そうである。なぜならば彼らも大人と同じように、神の契約とその教団に属しており、キリストの血において彼らにも罪からの救いと、信仰をよび起して下さる聖霊とが大人に対してと同じように、

約束されているのであるから、彼らも契約の徴しとしての洗礼によって、キリストの教会に接がれて、不信者の子供たちから区別されるべきである。それはあたかも旧約において割礼によって区別が行われているのと同じである。この割礼の代りに、新約聖書では洗礼が設定されているのである。

イエス・キリストの聖餐について

問七五 あなたが十字架におけるキリストの唯一の犠牲および彼のすべての富にあずかっていることをあなたは聖餐において、どのように想い起こされ、確信せしめられるか。

答 キリストは私とすべての信者に対して、彼の記念として、この裂かれたパンを食べ、この杯から飲むことを命じ、その際、次のようなことを約束し給うた。すなわち、第一に、主のパンが私のために裂かれ、杯が私にも分ち与えられるのを私が目で確かに見るのと同じように確かに、主の身体は十字架において私のために捧げられ、裂かれ、その血は私のために流されたということ。第二に、私がキリストの肉体と血との確かな標識として私に与えられる、主のパンと杯とを私が教職の手から受けて、身体的に飲食するのと同じように確かに、主御自身が、その十字架につけられた身体と流された血を、私の魂に飲食せしめて、永遠の生命に至らしめ給うということ。

問七六 キリストの十字架につけられた御身体を食い、その流し給うた御血を飲むとはどういうことであるか。

答 それは単に信仰心をもってキリストのすべての苦しみと死とを受け容れ、それによって、罪の赦しと永遠の生命とを得るというだけではない。さらにまたそれとともにキリストの中にもわれらの中にも同時に住み給う聖霊によって、キリストの祝福せられた体と次第に一つにせられ、その結果、彼は天に在し、われらは地上にいるけれども、われらが主の肉の肉、主の骨の骨となり、一つ霊によって（あたかもわれらの身体の肢々が、一つ魂によるように）永遠に生き、また支配される、というのである。

問七七 信ずる者たちがこの裂かれたパンを食い、この杯を飲むのと同じように、キリストは確かに信者にその御身体と御血を飲食せしめ給うということ、どこで約束し給うたか。

答 それは聖晩餐を制定し給うた時である。そこには次のように記されている。「主イエス、付され給う夜、パンを取り、祝してこれをさき、しかして言い給う。『これはなんじらのための我が体なり。我が記念としてこれを行え』夕餐（ゆうげ）ののち、酒杯（かさずき）をも前のごとくして、言いたもう。『この酒杯は我が血によれる新しき契約なり。飲むごとに、我が記念としてこれをおこなえ。』なんじらこのパンを食し、この酒杯を飲むごとに、主の死を示して、その来たりたもう時にまで及ぶなり」。この約束は聖パウロによってもまた繰り返えされている。すなわち彼は言う、「われらが祝うところの祝の酒杯は、これキリストの血に与るにあらずや。我らがさく所のパンは、これキリストの体に与るにあらずや。パンは一つなれば、多くの我らも一体なり。皆ともに一つのパンに与るによる」。

問七八 それならば、パンとぶどう酒とがキリストの真の体と真の血とになるのであるか。

答 そうではなく、洗礼における水がキリストの血に変えず、また罪の洗い潔めそのものになるのでもなく、ただその神的な標識および保証にすぎないのと同様に、聖餐における聖なるパンもキリストの体そのものではない。ただし聖礼典の方式と慣習にしたがって、キリストの体と呼ばれてはいるが。

問七九 それならば、なぜキリストはパンをその体、杯をその血、あるいは、その血による新しい契約と呼び給い、また聖パウロはイエス・キリストの体と血に与ると呼ぶのであるか。

答 キリストがそのように語り給うのには、大きな理由がある。すなわち、キリストはそれによって、単に、あたかもパンと葡萄酒とがこの世の生命を支えるごとくに、その十字架につけられ給うた体と流された血も、永遠の生命に至るわれらの魂の飲食物であるということ、われらに教えようとし給うだけではない。むしろ彼は、この眼に見える徴しと保証とによって、あたかもわれらが主の記念としてこの聖なる標識を肉の口をもって受けるのと同じように、真実に彼の真の体と血に、聖霊の働きによって与る、ということ、またあたかもわれら自身がわれら自身の身において一切を忍び、また一切を完うしたかのごとく、彼の苦しみと従順は、確かにわれら自身のものである、ということ、われらに保証しようと欲し給う。

問八〇 主の聖餐とローマ教皇のミサとの間にはどのような違いがあるか。

答 聖餐はイエス・キリスト御自身がすでに十字架において成就し給うた、彼の唯一の犠牲によって、われらはわれらの一切の罪の完全な赦しを得ている、こと、また、われらは今彼の真の御体をもって、今、天において父の右にいまし、そこにおいて礼拝せられることを欲し給うキリストと聖霊によって一体とせられる、ということ、われらに証しする。しかし、ミサは生きている者たちと死んだ者たちのために、キリストが今も日ごとにミサ執行の司祭によって犠牲とされるのでなければ、彼らは、キリストの苦しみによって、罪の赦しを得ない、ということ、また、キリストは身体をもってパンと葡萄酒の形体のもとに在し、したがってその形において礼拝されるべきである、ということ、教える。したがって、ミサはその根底において、イエス・キリストの唯一の犠牲と苦しみの否認、また呪われるべき偶像崇拜に他ならない。

問八一 主の食卓に来るべき人はどういう人か。

答 それは、自分の罪を嫌いながらも、なお、この罪が赦され他の弱さもキリストの苦しみと死とによって掩われることを信じ、またいよいよ信仰を強められ、その生活を改めたいと切望しているものたちである。しかし悔い改めぬ者、偽善者はその飲食によって自ら審判をまねく。

問八二 しかし、その信仰告白と生活とによって、不信者であり、不敬虔者であることを示している人々もまたこの晩餐にあずからしめらるべきだろうか。

答 そうではない。なぜならば、そのことによって神の契約が破棄され、神の怒りが全教団に向かって引き起こされるからである。それゆえにキリストの教会は、キリストとその使徒たちの規律にしたがって、かかる者らをその生活を改めるまで鍵の職務によって閉め出すべき責任がある。

問八三 鍵の職務とは何であるか。

答 聖なる福音の宣教とキリスト教的戒規である。この二つによって、天国は信者に開かれ、不信者に閉ざされる。

問八四 聖なる福音の宣教によって、天国はいかにして開かれ、また閉ざされるのか。

答 それは、キリストの御命令に従って、すべてのまた一人一人の信ずる者に、彼らが真の信仰をもって福音の約束を受け入れることに、かれらのすべての罪はキリストの功績のゆえに神によって真実に赦されるということ、しかし、これに反して、信じない者と、偽善者に対しては、彼らが回心しない限り、彼らの上に神の怒りと永遠の定罪とが下るということが宣べられ、公に証しせられる。その福音の証しに従って、神はこの世においても来るべき世においても審きをなさんとし給うのである。

問八五 天国はどのようにしてキリスト教的戒規によって開かれたり、閉ざされたりするのであるか。

答 それは、キリストの御命令に従って、キリスト者たる名の下に非キリスト教的な教えや行状をなすものらを、数度、兄弟愛からの忠告を受けながらも、その誤りと不徳を廃めないなら、彼らは教会か、あるいは教会によってその役目に任命されたものに訴えられ、もしも彼らがこの忠告を聞き入れないならば、役員たちによって、聖礼典の陪餐停止によってキリストの教会から閉め出され、神御自身によってキリストの御国から閉め出される。そして、彼らが真の改心を約束し、示すならば、再び、キリストと教会の肢として、受けいられるのである。

問八六 それならば、何ら我らの功績なくして、恩恵から、キリストによって、われらの悲惨から救われているとするならば、なぜわれらは善行をなさなければならないのか。

答 そのわけは、キリストはその血によってわれらを贖い給うた後に、さらにその聖霊によって御自分の似姿に従って、われらを新たにし給い、かくて、われらは全生涯をもつて、その恩恵に対して、神に感謝をあらわし、そしてわれらによって神が讃えられるためである。さらにまた、われらは信仰の実によってわれらの信仰について確かめられ、神に祝福された行状によってわれらの隣人をもキリストに導くようになる。

問八七 それならば、感謝なく、悔い改めなき生活から神に向かって回心しない人々は祝福されないのか。

答 決して祝福されない。なぜならば、聖書は、「淫行の者、偶像をおがむ者、姦淫をなすもの、盗するもの、貪欲のもの、酒に酔うもの、罵る者、奪う者などは、みな神の国を嗣ぐことなきなり」といっているから。

問八八 人間の真の悔い改め、あるいは回心はいくつから成立っているか。

答 二つである。古き人の死滅と新しき人の復活である。

問八九 古き人の死滅とは何か。

答 罪を心から悔い、これを憎み、これからのがれることである。

問九〇 新しき人の復活とは何か。

答 キリストによって心から神を喜び、神の御旨にしたがって、すべての善い行いに、生きることに楽しみと愛とを持つことである。

問九一 しかし善い行いとは何であるか。

答 それは、真の信仰から、神の律法にしたがって神の栄光のためになされたことのみを指し、自分の勝手な考えや人間の判断に基づいてなされたことではない。

問九二 主の律法とは何であるか。

答 神はこれらのすべてを語り給うた。

第一戒

我はなんじの神エホバをエジプトの地その奴隷たる家より導き出せし者なり、なんじ我が面の前に我のほか何物をも神とすべからず。

第二戒

なんじ自己のために何の偶像をも彫むべからず、また上は天にある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず、これを拝むべからず、これに事（つか）うべからず、我エホバなんじの神は嫉む神なれば我を悪む者にむかいては父の罪を子にむくいて三、四代におよぼし、我を愛しわが戒めを守る者には恩恵をほどこして千代にいたるなり。

第三戒

なんじの神エホバの名を、妄（みだり）に口にあぐべからず、エホバはおのれの名を妄（みだり）に口にあぐる者を罰せではおかざるべし。

第四戒

安息日を憶えて、これを聖潔（きよ）くすべし、六日の間勞（はたら）きてなんじの一切の業をなすべし、七日はなんじの神エホバの安息なれば何の業務をも為すべからず、なんじもなんじの息子息女もなんじの僕婢なんじの家畜もなんじの門の中における他国の人もしかり、それはエホバ六日の中、天と地と海とそれらの中の一切の物を作りて、第七日に息みたればなり。これをもてエホバ安息日を祝いて聖日としたもう。

第五戒

なんじの父母を敬え、これなんじの神エホバのなんじにたもうところの地になんじの生命の長からんためなり。

第六戒

なんじ殺すなかれ。

第七戒

なんじ姦淫するなかれ。

第八戒

なんじ盗むなかれ。

第九戒

なんじその隣人に対して虚妄の証拠をたつるなかれ。

第十戒

なんじその隣人の家を貪るなかれ、またなんじの妻およびその僕、婢、牛、驢馬ならびにすべてなんじの隣人の所有を貪るなかれ。

問九三 これらの戒めはどのように区分されるか。

答 二枚の板にである。その第一は、四つの戒めで、われらが神に対してどのような責任を果さねばならないかを、教える。

問九四 主は第一戒において何を求め給うか。

答 それは、わが魂の救いと祝福に対する危険に際し、すべての偶像礼拝、魔術、迷信的呪文、諸聖人あるいはその他の被造物のよび求めを避け、逃れて、唯一の真の神を正しく知り、神のみに信頼をおき、あらゆる謙遜と忍耐とをもって神にのみすべての善きことを期待し、全き心をもって神を愛し、畏れ、敬わなければならない。かくて神の御旨に少しでも逆うよりはむしろすべての被造物を棄てるようになる。

問九五 偶像礼拝とは何であるか。

答 御言において御自身を啓示し給うた唯一の真の神の代りに、あるいはこれとならんで、人間が信頼を置くような、他の何者かを、考え出し、あるいはそれを所有することである。

問九六 神は第二戒において何を望み給うのか。

答 われらは、神がその御言において命じ給うたのとは違った方法で、神の像を作ったり、あるいはこれを礼拝したりしてはならない、ということである。

問九七 それならば、われらはいかなる偶像をも一切作ってはならないのか。

答 神は決して模写され得ないし、また模写されるべきではない。しかし、たとえ被造物が模写されようとも、人間がそれらを礼拝したり、あるいはとれによって神に仕えるために、そのような像を作ったり、これを持つことを神は禁じ給う。

問九八 しかし信徒の書物として絵画は教会内で許されないであろうか。

答 許されない。なぜならば、私たちは神よりも賢いはずがない、神はその信者を、物言わぬ偶像によってではなく、御言の活ける説教によって教育し給うことを望んでおられるから。

問九九 第三戒は何をいおうとするのか。

答 われらが単に呪いと偽りの誓いをもつてするのみならず、また不必要な誓いによって、神の御名を汚したり、乱用しないこと、あるいは沈黙や傍観によってこのようなおそれるべき罪に関与しないこと、要するにわれらは神がわれらによって正しく言いあらわされ、よび求められ、礼拝され、われらのすべての言と行いとによってあがめられるように、ただ畏れと恭しさとをもって、神の聖なる御名を用いることである。

問一〇〇 それならば誓いと呪いによって神の御名を汚すことは、それをできるだけ防ぎ止めようとしない者に対しては神が怒り給うほどに、重い罪であろうか。

答 確かに、その通りである。なぜならば、神の御名を汚すこと以上に大きな罪はなく、あるいはそれ以上に烈しく神の怒りを引きおこすものはないからである。それゆえに神はそれを死をもって罰するように命じ給う。

問一〇一 しかし、私たちは敬虔な態度をもって神の御名によって誓ってもよいか。

答 それはよろしい。官憲がそれを要求した場合、あるいは神の栄光と隣人の救いとのために、誠実と真実とを保ち、これを促進するために必要であろう。なぜならばそのような誓約は神の言に根ざしているからである。したがって旧約および新約において聖者たちによって正しく用いられている。

問一〇二 われらは聖者たち、あるいは他の被造物によっても誓ってよろしいか。

答 いけない。なぜならば正しい誓いとは、神がわれらの心を探り知り給う唯一の方として、真理に証しを与え、もしも私が偽って誓うならば、私を罰せんとし給うように、神を呼び求めることである。このような栄誉は他のいかなる被造物にも帰せられないのである。

問一〇三 神は第四戒でどのようなことを望み給うか。

答 神は第一に、宣教のわざと学校とが営まれること、ことに私が特に安息日に神の教会に来て、神の御言を学び、聖礼典を守り、主を公に呼び求め、キリスト教的施しをすることを欲し給う。第二に、わが生涯のすべての日が悪しきわざを止め、主がその御霊によってわが中にはたらき給うようにし、この世の生涯にあって、永遠の安息を始める、ということである。

問一〇四 神は第五戒において何を望み給うか。

答 私が私の父、母および私より上に立つすべての人々に対して、すべての尊敬と愛と誠実とを示し、正しき服従をもって、すべての善き教えと所罰に自らを服従せしめ、また彼らの欠点に対しては忍耐すべきことである。なぜならば、神はかれらの手によってわれらを支配することを欲し給うからである。

問一〇五 神は第六戒において何を望み給うか。

答 私が私の隣人を心の思い、言葉、あるいは挙動をもって、ましてや行動をもって、罵り、憎み、害し、殺したりしないで、また一切の復讐心をすてて、また私自身を傷けたり、ことさらに危険を冒すようなことをしないことである。それゆえに、官憲も殺人を防ぐために剣を帯びているのである。

問一〇六 しかしこの戒めは殺すことについてのみ語っているのか。

答 神は殺人の禁止によって、このようなことを教えている。嫉妬、憎悪、怒り、復讐心を殺人の根として憎み、そのようなことすべては神の御前では、一種のかくされた殺人であると。

問一〇七 しかし、今述べたように、われわれが隣人を殺さない、というだけで十分であるか。

答 そうではない。なぜならば、神は、嫉妬、憎しみ、怒りを罪する時、われらが自分の隣人をわれらのごとく愛し、彼に対して忍耐、平和、柔和、慈悲、親切を示し、われらにできる限り、彼の禍害を遠ざけ、さらにわれらの敵に対して善をなすようにわれらに望み給うからである。

問一〇八 第七戒はどのようなことを求めているか。

答 それは、すべての不貞が神によって呪われていると、それゆえにわれらは、聖なる結婚生活においても、独身生活においても、心から不貞を憎み、純潔に慎しみ深く生活しなければならない、と言うことである。

問一〇九 神はこの戒めにおいて姦淫およびそれに類する罪だけを禁じているか。

答 われらの肉体と魂とは共に聖霊の宮であるから、われらがこの二つを清潔にきよく保つことを神は望み給う。それゆえにすべての不貞な行動、動作、言葉、考え、欲望、およびそれらに誘うものはすべて禁じ給うのである。

問一一〇 神は第八戒において何を禁じ給うのか。

答 神はただに官憲の罰する盗みと強盗を禁じ給うのみならず、暴力によってであるにせよ、あるいは権利を装うにせよ、（不正な目方、不正なものさし、不正な枴、不正な品物、不正な貨幣、不正な利息）その他神に禁じられている方法によって、隣り人の財産を自分のものにしようとするすべての行為、企てをも盗みと見なし給う。そしてこれらに、すべての貪欲と、神の賜物の無駄な浪費も加えられる。

問一一一 しかし神はこの戒めにおいてあなたに何を命じ給うのか。

答 それは、私が自分にできること、なしてもよいとであるならば、隣り人の利益を増し、私が他人に取り扱ってもらいたいと思う通りに彼を取り扱い、困窮の中にある貧しい人々を、助け得るように、誠実をもって努力する、ということである。

問一一二 第九戒ではどのようなことが要求されるか。

答 それは、私が誰に対しても偽りの証しをせず、誰に対しても人の言葉を曲げず、陰口や悪口を言わず、誰をも調べることなく性急に人を罪に定めるようなことに加担しないで、すべて偽りとあざむきとを、悪魔固有の業として、神の重い怒りのゆえに避けて、裁判その他の事柄においては真実を愛し、正直に語り、告白し、自分のなし得る限り、私の隣人の名誉と幸福とを守り、かつ増加するようにする、ということである。

問一一三 第十戒ではどのようなことが要求されるか。

答 それは、神の戒めのどれに対してもさからうような最も小さい欲望や思念が決してわれらの心におこるととなく、かえって、絶えず全心からすべての罪を憎み、一切の正しいことに喜びを持つようになる、ということである。

問一一四 しかし神に向って回心した者はこのような戒めを完全に守り得るのか。

答 守れない。最も聖なる人々であっても、この世にある限り、この服従のごく少しの端緒しか持っていない。それにもかかわらず、熱心な意図をもって、僅かの戒めではなく、神のすべての戒めにしたがって、生活し始めるのである。

問一一五 それならば、この世において誰も戒めを守れないのに、神はなぜ私たちにそのように厳格に十戒を教え給うのであるか。

答 第一に、われらの全生涯にわたって、われらがいよいよ自分の罪深い性質を知り、キリストにある罪の赦しと義とをいよいよ熱心に求めるようになるためである。第二に、われらはいよいよ神の似姿へと新たにせられ、ついてはこの世の後に完全の目標に達するために、神に向かって聖霊の恵みをたえず祈り求めるためである。

祈禱について

問一一六 なぜ祈禱はキリスト者に必要であるか。

答 それは神がわれらに求める感謝の最も主要な部分であるからである。また神は神の恵みと聖霊とをたゆみなく熱心に祈り求め、それを神に感謝するものにも、それを与え給わんとなさるからである。

問一一七 神の御心にかない、神が聞き給う祈禱はどのような特長があるか。

答 第一に、御自身をその御言においてわれらに啓示し給いし唯一なる真の神にのみ、神がわれらに求めよと命じ給いしすべてのものを心から祈り求めることである。第二に、われらが自らの困窮と悲惨とを正しく根本的に認識し、神の尊厳の前に謙遜になることである。第三に、神がその御言においてわれらに約束し給いしごとく、われらがそれにふさわしくないにもかかわらず、主キリストのゆえに、確かにわれらの祈りを聞き給うという堅固な根拠を有することである。

問一一八 どのようなことを求めよと神は私たちに命じ給うたか。

答 魂と肉体とに必要なすべてのことであるが、主キリストはこれらを自らわれらに教え給うた祈りの中に要約し給うた。

問一一九 主の祈りとは何であるか。

答 「天にましますわれらの父よ、願くは御名を崇めさせ給え、御国を来たらせ給え、みこころの天になるごとく地にもならせ給え、我らの日用の糧を今日も与え給え、われらに罪を犯す者をわれらが赦すごとく、われらの罪をも赦し給え、われらを嘗試（こころみ）にあわせず悪より救い出し給え。国と権（ちから）と栄とは限りなくなんじの有（もの）なればなり。アーメン。

問一二〇 なぜ神はわれらに神をわれらの父よと呼びかけるように命じ給うたか。

答 それは神がわれらの祈りの初めにおいて、われらの祈りの基礎とならねばならない、神に対する子としての畏敬と信頼とをわれらの中に呼びおこし給うのである。すなわち、神はキリストによってわ

れらの父となり給い、われらが信仰において彼に求めるものを、われらの父たちが地上のものをわれらに拒まないよりもはるかに拒み給わないのである。

問一 二一 なぜ「天にまします」と付け加えられてるのか。

答 われらが神の天的尊厳について地的なるものを少しも考えないで、その全能に対して肉と霊のすべての求めを待ち望むためである。

問一 二二 第一の求めは何であるか。

答 御名を崇めさせ給え。それは第一に、あなたを正しく認識し、全能、智慧、恵み、義、憐れみ、真実が輝いているあなたのすべての御業によって、あなたを崇め、ほめ讃えしめ給え、ということである。第二に、われらのゆえにあなたの御名が汚されることなく、むしろあがめられ、たたえられるように、われらの全生活、思い、言葉、行い、を向けて下さいということである。

問一 二三 第二の求めは何であるか。

答 御国を来らせ給え。すなわち、われらが常にいよいよあなたに従い奉るものとなりますように、御言と御霊とによってわれらを支配していただきたい、あなたの教会を守り、強めていただきたい、あなたがすべてにおいてすべてとなるころの、あなたの御国が完全に来たる時まで、悪魔のすべてのわざ、すなわち、あなたにさからって立つすべての権力、あなたの聖なる御言に反対して立てられるすべての悪い計略を亡ぼしていただきたいということである。

問一 二四 第三の求めは何であるか。

答 みこころの天になるごとく地にもならせ給え。すなわち、われらも、すべての人も自分の意志を棄て、抗弁することなく、ただ善のみにていますあなたの御旨に服従するように、また天にいる御使たちのように、すべての人が自分の務めと職業とを喜びと真実をもって成しとげることができるように、ということである。

問一 二五 第四の求めは何であるか。

答 我らの日用の糧を今日も与え給え。すなわち、あなたがすべての善きものの唯一の源泉であり、あなたの祝福がなければ、われらの配慮も努力も、あるいはあなたの賜物もわれらの益とはならぬことを、われらがそれによって知り得るように、またそれゆえにわれらの信頼をすべての造られたものから引きはなして、あなたのみ置くように、すべて私たちの肉体に必要なものを御配慮下さい、ということである。

問一 二六 第五の求めは何であるか。

答 われらに罪を犯す者をわれらが赦すごとくわれらの罪をも赦し給え。すなわち、憐れな罪人であるわれらが今もなおもっているすべての過失と悪とをキリストの血のゆえに、われらに帰することなくらしめ、われらもまたあなたの恵みのとの証を自らの中に見出して、われらのすべての熱心をもってわれらの隣人を心から赦すものとなりますように、ということである。

問一二七 第六の求めは何であるか。

答 われらを嘗試（こころみ）にあわせず悪より救い出し給え。すなわち、われらは生来真に弱く一瞬間も立つことができないにもかかわらず、さらに悪魔、この世、私たち自身の肉、というわれらの恐ろしい敵は休むことなく襲いかかって来るゆえに、願くはわれらを助け、あなたの聖き御霊の力によって強め、彼らに対して烈しく立ち向い、この靈的戦いの中に負けることなく、最後にはわれらが完全な勝利を得るように、ならせて下さい、ということである。

問一二八 あなたはどのようにしてこの祈りを終えるか。

答 国と権力と栄とは限りなくなんじのものなればなり。すなわち、われらの王としてすべてのものの上に力を持ち、すべてのよきものをわれらに与えようとしておられ、また与えることができるがゆえに、われらはすべてこれらのことをあなたに祈り求める。それは、これによってわれらではなくて、あなたの聖なる御名が永遠にあげられるためである、ということである。

問一二九 アーメンと言う小さい語は何を意味するか。

答 アーメンは、これは真実であり、確かであるべきであると言う意味である。なぜならば私がこれらのことを神に求めている、と私が自分の心の中で感ずるよりも、もっと確かに私の祈りは神に聞かれているからである。

トップへ
[キリスト教信条集](#)

© 2017 profession-of-faith-jp.

<https://profession-of-faith-jp.github.io/site/articles/heidelberg-03.html>